

II
—
10

自国研究としての日本研究・外国研究としての日本研究

——二つの日本研究の協調的競争の可能性——

（議長 杉本秀太郎）

発表 園田英弘

この文章は、日本人による日本研究と日本人以外による日本研究の違いを明確にし、あわせて異なる二つのタイプの日本研究が相互に刺激し合うことによって、新しい研究のパラダイムが形成される可能性を模索しようとするものである。

この二つの日本研究がもしも全く異質で共通性のないものであったなら、両者の間の競争や協力は非常に困難を極めるであろう。しかし、職業的研究活動の交流とともに、両者は現在共通の議論の土俵を持つに至っている。

それは、一方においては日本側における専門的研究の膨大な蓄積と極度の専門分化の進行によって「木を見て森を見ず」という状況が生じ、その反省から専門の枠を越えた幅広い日本研究への模索が始まったことであり、他方においては、海外では日本に関することならば専門を度外視してなんでも研究した過去の総合的な日本学に対する反省から、専門志向的(discipline oriented)な研究態度が日本研究に台頭してきたことである。変化の方向は日本の場合と海外の場合では逆であるが、専門―学際―総合という連環しあう問題をめぐって、世界の日本研究者は自分の問題として議論することができるようになったのである。そして、二つのタイプの日本研究が相互に競争しかつ協力し合う条件は、このように共通に議論の土俵ができてきた現在においてこそようやく満たされよ

うとしているのだと考える。

一、二つの日本研究

議論の出発点として、二つのタイプの日本研究とは何かということを最初に考えてみよう。

日本人による日本研究とは、自分の生まれ育った国の研究であり、それはより一般的な表現をすれば、自国研究としての日本研究ということになるであろう。もちろん、世界の多くの国ではその国の構成メンバーとその国の関係を「自国」という言葉で一括できるほどには単純ではない。ベトナム系の中国人で、現在ではアメリカの市民権をもつ研究者のアメリカ研究を自国研究としてのアメリカ研究と呼ぶべきかどうか、あるいはそのように呼ぶことがなんらかの意味があることなのか、簡単には判断しがたい。

特に、欧米においては言語習得の容易さ、留学・旅行などの接触の頻繁さ、研究者の国境を越えた移動・移住などのために、「自国」意識や「外国」意識が日本の場合ほどには固定化されていない。しかし、このような知的活動・交流の「超」国境化にもかかわらず、自分が長期にわたって深くかわりあった「国」に対する姿勢・態度は、そうでない国に対する姿勢や態度とは同じではない。人の交流が過去にみられなかったほど頻繁になった二十世紀後半においても、自国研究あ

るいは自国研究的な研究は世界の各地にみられるのではなからうか。

日本の場合は、事情はより単純であり明確である。日本研究を行っている者の多くが、日本で生まれ育ち、日本語を母国語とする、いわゆる日本人であり、彼等の多くは今後とも日本人として日本に住み続ける可能性が高い研究者である。彼等にとって、日本は知的好奇心や研究の対象という以前に、抜き差しならない関係をもってしまった自分の生活そのものであるいは自分自身というものになるであろう。

自国研究には、日本人の日本研究に限らず、世界各国に共通した特色があるように思われるが、それに触れる前に外国研究としての日本研究について簡単に触れておきたい。「外国」研究としての日本研究は、その起源が宣教師による日本布教の成果報告であったり、博物学的研究であったり、あるいはまた外交関係の樹立にともなう外交団の日本訪問であったりさまざまであるが、現在では大学や研究機関などで組織的に行われている研究が日本研究の中心である。

この海外における日本研究が現在どのような状態にあるかは、今回のシンポジウムにも新しい情報が提供されると思われるが、国際交流基金や新堀通也氏の研究グループなどが出している既存のデータを総合してみると、世界には約二五〇機関、三〇〇〇人の日本研究者がいることが明らかになって

いる（『諸外国における日本文化研究の現状』国立民族学博物館、昭和六十一年）。

しかし、これら既存のデータには多くのものがあり、しかも最近では、新設される日本学科や日本研究センターなど多いので、将来的にも海外の日本研究者・研究機関の正確な実態把握は困難だと思われるが、ともあれ現在では、日本以外の国々での日本研究は質・量ともに急速な高まりを示しており、これらが「自国」研究としての日本研究と異なる系譜の日本研究を形成しているということは明らかであろう。

もちろん外国研究としての日本研究というものも、それぞれの国の日本研究の歴史、研究の蓄積などによって同一ではないが、共通した部分も多いのである。今から四半世紀前になるがライシャワーは海外の日本研究の意義を次の三つに求めた。

第一に、「外国人の日本観」を「健全」かつ「見識」あるものにする。これは重要な問題ではあるが、研究そのものについて述べたものではなく日本研究の社会的効用について述べたものであるから、この文章ではこの問題にこれ以上深入りをしないことにしよう。

第二は、「日本の学者と違った観点から日本を眺め、その新しい洞察と新しい解釈によって、日本人自身の研究に寄与」できる点である。これは、日本人の日本研究を外から刺激す

ることである。現在でも期待される重要な役割である。

第三に、日本人による日本研究は言葉に障害などのために、その研究成果がなかなか海外に知られない。したがって、「外国の（日本を研究している）学者は、この言語的障壁を越えて知識や思想の真の交流を実現する」ことを通じて、「日本および世界の学術振興」に貢献することができるとされるのである（Energy, Vol. 1, No. 3, 1964, 特集「海外における日本研究」）。

六十年代におけるライシャワーのこの問題提起は、基本的には現在でも通用する。日本人の日本研究と異なる角度から研究することによって日本の研究を外から刺激し、あわせて日本での研究を海外の様々な学問分野へ紹介するという役割は、今もなお海外の日本研究者に期待されている役割であろう（現在、この問題についてどのような議論がなされているかは、昨年のヨーロッパ日本学会で発表されたJan van Bremen氏の“Anthropology and Japanese Studies”が手ざわのいい整理をしている）。

しかし、海外の日本研究をとりまく事情は複雑化し変化した。六十年代には顕在化していない問題が重要視されるようになった。それは、「日本学から日本研究へ」(from Japanology and Japanese Studies)という言葉に象徴される、日本研究の専門化をめぐる周知の問題である。この問題は、今回

のシンポジウムのネウストプニー氏やニッシュ氏の発表でも触れられると思うが、日本研究におけるライシャワー的オブティミズムは、八十年代には後退しているということだけ指摘しておこう。

二、自国研究のパラドックス

世界の各国はそれぞれの方法で、自分の国の研究を行っている。中国人は中国を、フランス人はフランスを、アメリカ人はアメリカを当然のこととして研究している。自分の国の歴史や文学や政治を研究することは、研究者自身が生まれかつそこで生活している自分の世界を知ることであり、特別の努力なしに自然に湧き出る知的好奇心の発露として自国の研究がなされる場合も多い。

自国研究というのは、一つの危ういバランスの上に成り立っている。「自然に湧き出る知的好奇心」に基づき研究を進めるかぎり、特定の時代や特定の文学の研究など「自国」の一部分の研究以上に研究が拡大されず、逆に「自国」というものを余り意識し過ぎると偏狭なナショナルリスチックな研究に陥りやすいのである。

過去において、自国研究は日本のみならず多くの国でこのディレンマから自由だったわけではない。強烈なナショナルリズムを背景として、自国に対する強い関心を持たなければもた

れるほど、それは自国の優秀性や極端なまでの独自性を強調する研究を生み出したり、過度に自国の文化の普遍的な価値を主張する思想や社会科学の理論を作り出したりしたのである。江戸時代後期の国学や戦前期の超国家主義的日本解釈や十九世紀ドイツのドイツ学がそのような例であり、現在でも強烈な「自国」意識のもとになされている自国研究は少ないわけではない。

一方、このような強烈な自国意識い裏打ちされない自国研究では、自国の部分部分を個人的な研究関心にしたがってラダムにおこなっていく傾向にある。自国研究では、自国のある部分を研究していることはあっても、その部分がより大きなものの一部を構成しているという意識が非常に希薄になつてしまうのである。言い替えれば、「自国」を一つのまとまりのある全体として意識することがほとんどないままに、それぞれの専門的関心にしたがって研究が進められていく傾向があるということである。

戦後の日本に一般化したのは、それ以前の過度に日本を意識し過ぎた研究姿勢への反省もあって、普遍的な立場から（言い替えればコスモポリタンの観点から）日本を研究するという態度であった。より正確に表現するならば、専門という普遍的な学問体系に立脚して、日本を単なる一研究の事例として研究するという立場である。それは往々にして、正しさが

既に認められた理論を、日本という具体的事例に適用するという形の研究をもたらした。自国研究としての日本研究は、その実質においては自国意識を抑圧することによって初めて成立していたといえるであろう。

このような研究の結果については後ほど検討することにして、外国研究としての日本研究と対比してみよう。「国」というものは、それ以外の「国」を意識したときに初めて明確な輪郭をもってくるものである。最も研究対象に密着して生活している人々は、その国の全体あるいは各専門の枠を越えた範囲に対する知的関心を持ちにくく、逆に遠くから日本を眺め、異邦人としてその国を体験する人々こそが、その国に対する幅広い関心をもちやすいというパラドックスがここにはある。対象に対する違和感・異質感こそが知的関心の根底にあるものだとなれば、外国人でこそ持てるこれらの感覚は研究を進める上での特権なのである。

過去の歴史においても、アメリカにとつてのトクビルの例を持ちだすまでもなく、外国人によってその国の大きな特色が「発見」・「再発見」された例は多い。外国研究として日本研究の一つの重要な使命がライシャワーの指摘するように、外からの観点から日本研究を行い、日本人の日本研究に刺激を与えることだとするならば、過去の日本学が持っていた総合的視野を放棄すべきではないと考える。それは、むぎむぎ

と自らの特権を放棄することではなからうか。

このように自国研究には、自国をまとめた全体として研究対象にしようとする方向性がない。「地域研究」というものを、ある地域を総合的に明らかにしようとする試みであるとするれば、自国においては地域研究的な発想はなりたちにくいのである。ヨーロッパにおける外国研究としての日本研究を総括するための組織としてヨーロッパ日本学会はあっても、日本には日本日本学会はないのである。そのような必要性も感じられていなければ、それを可能にする実態もないのである。

三、専門的研究の集合としての日本研究

日本人の日本研究は、日本ということに研究の対象を絞り込んだものの集大成というよりは、世界の多くの自国研究の場合と同様に、各専門分野別にバラバラになされてきた研究の集合である。自国研究という自覚的な努力の結果というよりは、意図しない結果としての日本研究ということになるであろう。「日本」の歴史や、「日本」の文学の研究者の場合は、研究の資料に制約されて、より強く「日本」というものを意識しているであろうが、その場合でも中世史や近代史あるいは平安文学や短歌史という日本の部分の研究であることに変わりはない。

従って、自国研究の最大の特徴は、外国研究の特徴が対象国の全体に関心を持つ地域研究的なところにあるとするならば、すぐれて専門志向的だという点にあるであろう。専門的研究とは、基本的には専門という枠組によって縁取られた研究対象を、「自国」や「外国」という区別無しに研究するものである。たまたま研究対象として選ばれたものが例え「自国」であったとしても、それは単なるケーススタディーとして選択されただけに過ぎないのであって、「自国」というところに特別の意味があるわけではないということになるであろう。

それぞれの専門がもつ研究の観点やスタイルという点では、専門というものは国境を越えた共通性を持つ。例えばここにピーター・バーク(Peter Burke)の『社会学と歴史学』(Sociology and History, 1980)という本がある。ヨーロッパを研究対象としている歴史家と社会学者の協力の可能性を模索した本であるが、そこには次のような言葉がある。

「少なくともイギリスでは、多くの歴史家は、今なお、社会学者を、明白なものを野蛮な抽象的な術語で述べ、場所や時間の感覚を欠き、個人を厳格な範疇に無理にはめこみ、また、何よりも以上に、自分たちのしていることは、『科学的』であると信じている人々とみている。他方、社会学者のほうも、歴史家を、無方法な素人風の近視眼的な事実収集家で、そのデータの漠然さは諸事実を分析する能力のなさ」と誠に釣

合っていると考えている。」(森岡敬一郎訳)

このような、両者の間の相互不信とその論拠はほとんどそのまま日本の場合にも当てはめることができる。私は、社会的な観点から主に日本の歴史を研究してきた研究者だが、方法意識としては私は日本人の日本の歴史研究者よりもイギリスの社会学者により多く共感をもつだろう。

このことは、私という個人の好みの問題ではない。専門というもののいわば宿命である。日本を研究しているイギリスの社会学者がいるとしよう。彼は経済成長率と就学率の関係を調べるために、理論的関心にしたがって日本のことを単なる事例として研究したとしよう。そして、日本人の社会学者でたまたまイギリスの労使慣行を研究している者がいたとしよう。彼等は、表面的にはイギリスと日本という別々の社会を研究しているが、その研究成果は経済社会学という普遍的な知識を増加させ、より確実なものにするために貢献していることになる。このようなスタイルの研究にとって、どの国を研究するかは第二義的な問題になるのである。

現在、日本人による結果としての日本研究を支えている専門の思想はこのようなものであり、西洋諸国で「日本学から日本研究へ」と主張されているときの「日本研究」(Japanese studies)も同様に専門に立脚してなされるケーススタディーとしての日本研究のことになるであろう。

ところで、専門重視とその帰結としての研究対象の相対的軽視は、専門的知識の普遍的妥当性や研究関心の万国共通性を前提とするものであった。私は専門的な研究の関心が既に述べたように、かなりの普遍性を持つことを認めるのにやさかではない。しかし、専門的研究の結果生まれてきた理論・解釈の普遍的妥当性を過度に強調するのは危険であると考え

る。たしかに自然科学の場合は、ソ連の物理学とアメリカの物理学とは同一のものである。もし両者の間に違いがあるとしたら、それはいずれかが間違った理論だというだけであって、国によって異なる物理学の体系があるわけではない。

しかし、人文科学や社会科学の場合は異なっている。人文科学や社会科学系の学問も自然科学のようになるべきだとする考えが特に十九世紀には強かったし、心理学や経済学が自然科学をモデルとしてかなり普遍的な理論構成に成功していることも否めない。しかし、フロイドのエディプス・コンプレックスが十九世紀のウィーンの家父長制的な社会構造の反映(E. Fromm)であり、マルクスの階級論が経済力・政治権力・文化的威信が三位一体的に結合している特殊イギリス的な状況を反映している(R. Nisbet)とすることが指摘されているように、真に普遍的な理論は文科系の学問にはまだ誕生していないというべきであろう。また、歴史学の研究に典型

的にみられるように、そもそも抽象度の高い普遍的な理論の構築などめざそうとしない学問も多いのである。

このように考えてくると、理論的な認識を主要な目的とする専門は、自らがどのような対象の分析を通して抽象度の高い認識を目指そうとしているのかを明確に自覚しておく必要があるということである。そして、世界に共通してみられる専門的な研究の関心から、世界のどこよりも身近で豊富に研究の素材がある「自国」の研究を行うことこそが、より確実なあるいはより抽象度の高い理論的認識に至る近道なのではなからうか。言い替えば、日本人によってなされている「結果としての自国」研究を、もう少し意図的・自覚的な日本研究にする必要があるのではないかということである。

四、日本研究の展望……比較研究の可能性……

すでに述べたように、日本の研究をしている日本人の多くは、日本研究者という意識はほとんどない。彼等は、経済学者であり、社会学者であり、文学や歴史の研究者なのである。複雑で多岐にわたる、しかも長い歴史を持つ日本というものを丸ごととらえられるような方法はない以上、日本の研究者は、なんらかの専門の研究者として知的訓練を受け、特定の分野の研究者として研究活動を続けていく以外にはないのである。

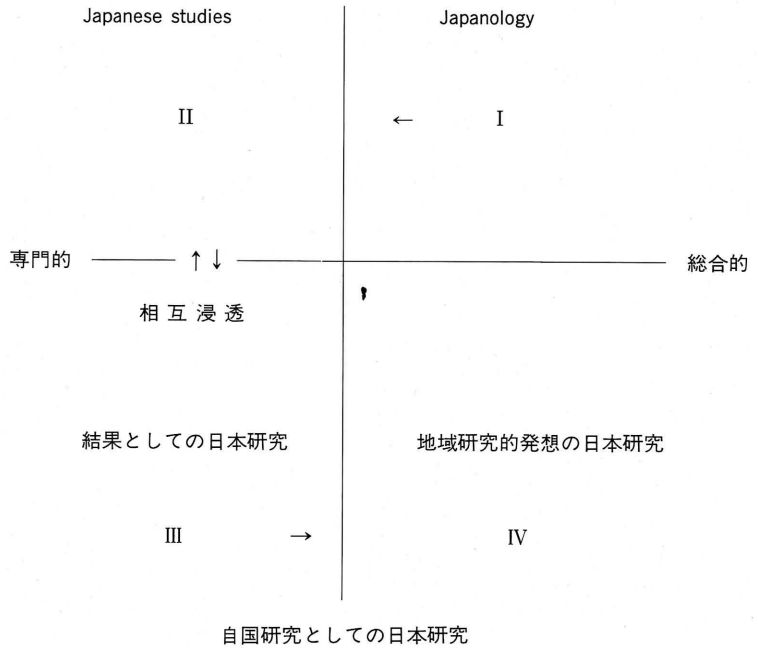
しかし、この日本という国を解明するために、各専門がばらばらに研究した「結果としての日本研究」のままで十分なのであろうか。日本は専門諸学の研究成果をもつと有機的に結合させて、より総合的な理解に到達できるよう努力するに値しない研究対象なのであろうか。別の表現をすれば、一つの地域を学際的・総合的に研究する立場を「地域研究」的研究を呼ぶならば、日本は日本人にとって「地域研究」の対象に成り得ないのかということが問題になろう。

かつて地域研究は、専門なしのなんでも屋的研究であったといわれている。このような研究が日本人の日本研究をリードしていくことは今後ともあり得ない。しかし、地域研究というものも専門を前提にした上での、学際的な知識の組織化・総合化というものを意味するようになっていく。すなわち、かつての地域研究は研究者個人が学際的・総合的になろうとしたために前学問的段階に終わってしまったが、現在の地域研究は複数の個人がそれぞれ専門諸学の研究成果を持ちよるといふ集団レベルに対応した研究の新しいスタイルである。そこではもはや、専門か地域かという二者択一はない。専門も地域も必要なのだ。

以上に述べた問題点を整理するために、簡単な表を書いてみよう。

I・IIは、外国研究としての日本研究がじょじょに専門志

外国研究としての日本研究



向的になっているが、まだ完全にそのようになっていない状態を示している。「日本学」も「日本研究」も共に健在なのである。今後、海外において専門志向性がどれほど強くなるかわからないが、「日本学」的色彩が弱まっていくことは確かであろう。しかし、世界は一律ではないから、今から日本研究

がアカデミズムの世界で市民権を確立していく国においては、新たに「日本学」が成立するかもしれないし、はじめから特定の専門を中心とする「日本研究」としてスタートするかもしれない。

いずれにしろ、外国研究はそれが日本の研究であるか否かを問わず、総合的視野をもちやすかった。外国研究としての日本研究はそれが今後どれほど専門志向性が強めようとも、このような日本研究の伝統は残るであろう。少なくとも私はそのように期待する。

IIIは、海外の「日本研究」的研究と日本の専門別の「結果としての日本研究」が研究交流の中心になっていく、あるいは現にそうなっているということを示している。専門的知識・データ処理の方法・研究の観点などを共有する海外の日本研究者と日本人の日本研究者との知的対話は、海外において「日本研究」的研究が一般化することによって、新たな段階をむかえることになるであろう。

一方、自国研究としての日本研究は、「日本学」的なものが分化してできたものではない。専門諸学がそれぞれにランダムに蓄積してきた、意図せざる結果としての日本研究であった。そのため、日本人の日本についての知識を専門横断的に組織化する求心的核が日本にはないのである。日本についての専門的研究の成果は、個々バラバラに各専門の成果とし

て分散している状態である。今後ともにこのような傾向は、強められこそすれ弱まることはないであろう。このような日本人の日本についての知見の拡散の状態を克服し、日本人の日本に対する地域研究的議論の場を設ける必要がある。

IVはこのことを図示したものである。繰り返すが、現在の地域研究とは、研究者個人が総合的になることではない。専門的知識・分析の組織化を通して、集団知として総合的な認識を得られれば事足りるのである。

最後に、この表には位置付けにくいので表からは省いたが、日本人の日本研究は日本というものにもっと本気で向かい合う必要があるのではないかとということである。専門諸学の普遍性の神話によりかき、日本の社会や文化を他の社会を分析するための用具として開発された既存の理論で解釈するのではなく、日本を分析するための概念を日本を研究する中から作りだし、そのことによって世界の人文科学・社会科学に貢献すべきではないかということである。しかしそれは、日本人は日本のことだけ研究していればいいと言っているわけではなく、また日本の極端な独自性を主張する日本学や日本賛美の日本論を提唱しているわけでもない。

「自国」を深く分析することこそが、そしてその結果をできるだけ専門的な学問体系の言語によってそれぞれの専門の中に位置付けることによってこそ、真に普遍的な人文科学・

社会科学の学問体系の創造に貢献し得るのだと主張したいわけなのである。そして「自国」というものを強く意識し、しかもかつての独善的自国研究が陥った致命的欠陥を避けるためには、比較という視点を導入することが不可欠である。

石田雄氏は、このような問題に次のように的確に述べている。「若い日本の社会学者で、特に外国語に熟達している人達の間では、日本の文化による制約などは重要ではないと思う人が多いかもしれない。しかし、それは彼等が意識していないだけで、日本語で考え、日本語で表現する以上、何らかの形で文化に影響されていることは否定できない。このことは日本の場合だけではなく、どの文化に属する人であっても同様で、およそいかなる文化にも規定されていない、のっぺらぼうの『世界の社会科学』というものはありえない。重要なことは特殊な文化による制約を、比較の視点をもち込むことによって越える努力をすることである。特殊な文化を通じてこそ、比較によってより普遍的な展望を開いていくことができるのであって、自分の文化を離れて、直ちに普遍的な理論が形成されると思うとき、それはほかでもない文化的帝国主義となる」（『日本の社会科学』）。

自国研究としての日本研究と外国研究としての日本研究という文脈でこの問題を考えれば、日本を他の国々と比較することとならんで、日本の広い意味での「文化」についてのさ

まざまな解釈を比較することが重要になるであろう。外から見た日本と内から見た日本のズレを一つの突破口として、よ

コメント1 S・リンハルト

園田先生のペーパーを読んだ時、そしていまのお話を聞いて、賛成できる点がたくさんありましたけれども、私、時間の関係で、それから、討論を進めるために、園田先生と違った意見だけを三つほど述べたいと思います。

第一に、日本人の日本研究は自国研究であり、外国人の日本研究は外国研究であるという表現の仕方にはあまり問題点を含んでいないように見えますが、実情を調べると、そう単純ではありません。例えば、外国に行つて、そこで外国人と結婚して住みつくようになり、二十年間も三十年間もその外国で日本研究をやった日本人の場合の自国は、いまの日本でしょうか。それとも、彼が多分死ぬまで住むその外国でしょうか。逆に、何十年も日本に住んでいた外国人の日本研究者もたくさんいます。彼らの多くの場合、日本という国は彼らの生活の基盤になっているに違いありませんが、日本は彼らにとって死ぬまで外国でしょうか。日本で育てられた外国人には、外国へ行つて、自分の持つてくる日本に関する知識や日本語の能力を生かしている人々も少なくありません。そういう人々の中には、外国でも日本的な生活様式を続ける人もいます。彼らは確かに日本人ではありませんが、日本は彼らにとって決して外国でもありません。

同じようなことは日本人と結婚した外国人日本研究者についてもいえるではありませんか。彼らの日本研究はもちろん自国研究ではありませんが、彼らの配偶者の自国研究になるといえましょう。

り深い日本の理解とそれを土台としたより普遍的な理論の形成に貢献できるのではなからうか。

それから、一度も日本に行かなかった日本研究者。いまはそういう研究者はまれになりましたが、ドイツにはそれを自慢に思っていた研究者がつい最近までいました。そういう研究者はまた違うと思います。私はいろいろな国に行つたことがあります。通算四年ぐらい過ごしたこの日本は、私にとって観光その他の理由で短期間いた国々のようなただの外国ではありません。

そういう生活条件によつて、日本は外国の日本研究者にとつてもある程度の自国となり、日本の日本研究者にとつてもある程度の外国、他国になる可能性があると思います。

第二、日本研究の内容にすこし深入りすれば、内容の定義も複雑になります。一般的に、日本研究は日本の文化、社会、経済などの研究であるといえるでしょうが、私はこういうふうに定義された日本研究の内容に問題は少なくとも二つ残つていると思います。その一は、確かに日本人の自国研究は日本研究になりますが、日本人の外国研究も第二の段階で日本研究になり得ます。外国人の日本研究者もある程度自国を研究するかもしれません。いいたいののは、外国研究の中にも自国研究の可能性を含んでいると思います。例えば、外国を研究する人が自分の国で一番興味を持つていることを外国で研究すれば、そうなりやすいのではありませんか。日本の学問の歴史に、蘭学者は自国研究の立場から外国研究をやりました。それは昔の話であるといえるかもしれませんが、現在活躍している日本の外国研究者の数少なくもない方々は、年を取るにつれて外国研究をやめ、日本研究を始めるのです。社会老年学をやっている私にとつ

てこれは非常におもしろい現象です。特にそういう方々の場合、彼らは外国を研究した時に自国研究をしたではないかという観点から、彼らの外国研究の再分析は日本研究に値する仕事ではあると思います。

第二の二、日本研究の内容については園田先生はあまり具体的に述べられませんでした。いまは国際交流の時代であるとか、日本社会が国際化にはいったとよくいわれる時代ですから、日本研究をただの自国研究として把握するのちよっと物足りないような気がします。例えば、日本の商社の海外における行動は、自国研究でもなく、外国研究でもない、その間に位置づけられると思います。もう一つの具体例を挙げますと、ヨーロッパ人が日本の明治時代の西洋建築を研究すれば、それもまた外国研究とも自国研究とも簡単にいえる研究ではないと思います。こういう自国研究と外国研究の半ばに置かれている研究も、国際時代にはなるべくたくさんしたほうがいいと思います。ただの自国研究の枠を越えたこの学問分野を、日本学、日本研究をやる研究者が見逃していいのでしょうか。

三番目の点ですが、外国の日本研究の傾向として総合的な日本研究から専門的な日本研究へという園田先生の解釈には、ちよっと間違いがあると思います。

まず第一に、外国の日本学、日本研究が始まって以来、専門的なすぐれた研究業績を上げた人も見逃してはいけません。そうでない人々、日本に関するなんでも屋さんは、専門を持たず、日本語がある程度できたから、日本のあらゆる側面を外国で紹介しました。ほかに日本研究者がいなかったから、なんでも屋さんの少数は大学の日本学教師として動き始めましたが、その日本紹介は、多くの場合、前学問的な段階にとどまりました。確かにいろいろなことについて書いた人がいましたが、しかし、こういう人たちが日本について総合的な観点を持っていたかどうか、私は疑問に思います。園田先生

は日本学の時代がよかったといっているようですが、私は日本学がそのなんでも屋さんを示すならば、彼らの時代が終わってよかったと思います。

しかし、外国の日本研究者の数はいつまでも日本の日本研究者のそれよりも少ないでしょうから、いま園田さんもおっしゃいましたように、将来も外国の日本研究者の多くは日本人のそれよりも幅広い研究活動を続けるでしょう。

そして、あの有名な「日本学から日本研究へ」というイギリスのジョッフリ・バーナスがいまから二十年前の六十年代にいい出したこの言葉は、実際に従来の日本学の拡大を意味した提言だったと思います。つまり、日本学の領域はそれまでは文学、歴史、日本語の研究だけであって、バーナスはこれに経済、政治、社会などの専門的な研究を加えたかったのです。

そういう事情の中で、少数の例外を別にすれば、過去にも現在にも日本全体を見る総合的な学問研究の傾向は外国の日本研究では見られませんが、現在はあらゆる分野の研究者が多くなっているから、昔は見られなかった傾向として、一つのテーマを取り上げて会議を行うことが可能になりました。いいかえれば、日本研究の限られたテーマの総合的な取り扱いが多くなっています。

ウィーン大学の日本学研究所の事例を一つ挙げますと、私はそこで十五年間、日本の老人の社会学的研究をいたしておりました。日本の老人の家族、労働、余暇などについて論文を書き、日本の老人大学、老人クラブの調査をいたしましたところ、若い研究者数名は日本の老年者の研究に興味を持つようになり、そして、今度は彼ら自身が日本の老人の住宅問題、定年制などについて調べ始め、いまは二人の研究者が私とともに、「日本の歴史の中における老人の位置」と「日本型福祉社会の老人問題対策」という二年間にわたる大きな研究プロジェクトを実行しております。そのほか、学生のアル

バイトを使って、日本の老人についての文献目録と日本の老人に関する世論調査の結果の再分析も行われています。ウィーン大学日本学研究所の日本研究はもちろん老人研究だけではなく、いままでにこのテーマに関して調査報告は五冊、論文は二十編以上も出版されました。それは二十年前には考えられなかった一つの大きなテーマ、「日本の老人」についての研究集中にもなっていて、総合的といえる日本研究の姿がこういうふうにな新しくあらわれています。以上の三つの点を頭に入れると、園田先生が簡単に説明されましたが、きれいに図式的に描かれた自国研究と外国研究としての日本研究との関連のモデルはちよつと崩れてしまふと思います。

あまり長くならないためにこの辺で終わらせていただいて、結論を述べたいと思います。園田先生のペーパーの全体を総合的に見た場合、園田先生は、日本学、日本研究はこれからこうやるべきであるという将来のための研究方針をつくろうという気がします。例えば、日本を意識しない「結果としての日本研究」はいけないとか、専門的な日本研究よりも総合的な日本研究が外国人の日本研究としていいということをしています。今は自然科学ではフuzzy理論(fuzzy theory)がはやっていると聞きました。このフuzzy理論のははつきりしないということらしくて、日本の文化、社会をもよくあらわす概念のようです。私はこれからも日本研究をフuzzyで、多様で、いろいろな形ですれば一番いいと思います。日本を意識する日本研究、日本を意識しない日本研究、総合的な日本研究や細かい専門的な日本研究、日本人や外国人やこれらのカテゴリーにあてはまらない人々の手による日本研究など、いろいろな形でなるべくたくさん日本研究が行われ、その上に国際的、学際的研究者の交流がもつとふえれば、それが日本研究、日本学に一番望ましいと思います。

コメント2 山崎正和

二つのものが大きく違っている時、それをいいあらわす日本のことわざが二つあります。一つは「月とスッポンほど違う」、もう一つは「ちようちゃんと釣り鐘のようにつり合わない」。学問的にいいますと、明らかに後のほう、「釣り鐘とちようちゃんほど違う」というのが、正しい言い方です。なぜならば、両方とも重さという共通の地盤の上で比較されているからです。一方、月とスッポンの間には何の共通性もありませんから、これは比較したことになるのです。日本研究を含めてあらゆる地域研究というのは、人間の営みを比較することで成り立つ問題です。ですから、当然、そこでは比較をどういう共通の地盤の上で行うか、ということが問題になるはずであります。西洋のイヌと日本のネコを比較しても、これは研究とはいえないのです。我々はネコやイヌについてはよく知っていますから、この比較がナンセンスであることはすぐわかります。しかし、例えば日本の歌舞伎と中国の京劇を比較する、あるいは日本の狂言と韓国のマダン劇を比較するという場合には、ことはさほど簡単ではありません。我々はまずそれが両方ともそれぞれに演劇であるという前提を立てなければ、比較しても意味がないのです。例えば能は果たしてドラマであるか。これについて野上豊一郎という有名な研究者は、能はドラマではないとさえたったのですが、もしそうだとすると、能を西洋の悲劇と比較することは初めから意味がないということになります。したがって、我々は日本の演劇の特殊性、あるいは日本の文化の特色を比較を通じて知ろうとすれば、どうしても、例えばドラマとは何であるか、あるいは経済活動とは何であるか、音楽とは何であり、礼儀作法とは何であるかという、人間の営みについての普遍的共通の認識をあらかじめ持つていなければなりません。

また、比較する場合に、どの地域の文化とどの地域の文化を比較

するかということも大きな問題であって、これをまったく恣意的に比較してみても始まりません。ひとつの地域が地域と呼びうる、有意の統一を持っているかどうかが前提となるからです。いつぞや、日本語とレプチャ語を比較して、その共通性を指摘した学者がありましたけれども、これは学問にとってあまり有益ではありませんでした。ある二つの言語地域を比較しようとするれば、その前に、言語学と地域の定義という共通の知識を必要とするのです。

いま申し上げた共通の知識というのが実はディシプリンなどでありまして、この会議ではどうやら、地域研究と専門研究、あるいはディシプリンとエアリア・スタディーズの関係が議論されてきたようでありますが、この問題にはいま私が指摘しているような側面があるわけであります。一つの面から見ますと、日本研究の中にさまざまな専門研究が含まれる。したがって、日本研究が広くて、各専門研究が深く、狭いという見方もできます。しかし、別の観点比較の観点 から見れば、専門研究のほうが広くて、地域研究のほうが狭いのであります。

この関係は一筋縄では片づきません。演劇について知っていないければ日本と中国を比較できないということがいえませんが、同時に、中国の演劇と日本の演劇を比較することを通して、演劇概念が新しく修正されるという面ももちろんあり、同時に、演劇研究のアプローチ、学問のディシプリンやメソッドそのものが修正を迫られるという側面もあります。

したがって、地域研究とディシプリナリーな研究というものは循環する関係にあります。これは、人文科学をやっている方々の方々はどなたもご存じのことではありますが、解釈学的循環というものがあります。元の言葉はヘルメノイティシャ・テルケルであります。解釈という行為の中で、全体と部分、大きいものと小さいものとの関係は絶え間なく循環していくのです。

さて、我々は要するに人間というものが知りたい。人間の現象、文化というものが知りたいと思つて社会科学や人文科学をやっています。そういう我々の基礎的な好奇心にとつて、地域という枠組みはどこまで有効なのかということを考えなければなりません。人間の現象を包括する枠組みとしては、従来、例えば歴史的な時代というものがありません。歴史的な時代だけですべてが説明できると考えたのは、例えばマルクスの経済発展説であります。こういう立場に立てば、地域の違いというのは時代の遅れ、進歩の遅れということになりまして、有名な話ですが、マルクスは東洋の停滞というようなことをいったわけであります。確かに時代的な枠組みというものがあることも、否定できません。例えば、十七世紀の日本と十七世紀の西洋の距離を見る。一方、十七世紀の日本と現代の日本の距離を考えますと、どちらが大きいかは大変疑問であります。私にいわせれば、多分、十七世紀の日本と現代の日本との距離のほうがずっと大きい。東西の大きさよりも、時間的な長さのほうが大きいと思われまふ。

あるいはまた、人間の文化を比較する上で、行動の種類を枠組みにして考えることができます。人間はいろんな営みをしておりまふ。農業をしている人もあれば、商業をやっている人もいます。ところで、日本の農民と商人の違いは、ひょっとすると、日本の商人と西洋の商人の違いより大きいかもしれません。したがって、日本研究というよりは、商人研究あるいは商業研究のほうが有効である面もあるでしょう。

さて、地域というものが研究の枠組みとして有効だとして、一体どういう地域を枠組みとして取り上げるのが最も有効であるかという問題が出てまいります。これは国際日本文化研究センターのシンポジウムでありますから、日本が研究の枠組みになることが自明のこととされています。しかし、それが自明のことでないのは明らか

でありまして、ある問題に関しては、日本という枠組みよりも、アジアという枠組みのほうが有効であるかもしれませんし、逆に、日本という枠組みは大きすぎて、関西、関東という枠組みのほうが有効であるかもしれません。実際に沖縄の舞踊と東北の舞踊を比較した場合、ひよっとすると、沖縄の舞踊は中国の舞踊のほうに近いかもしれない。こういった場合、地域の枠組みをどう取り上げるのが最も有効かという問題が出てまいります。

さらに深刻なことでありますが、果たして地域というのは地理概念であるか、ということも問題になります。例えば、生活文化、日常の生活の様相という点から見れば、現代の日本は、東南アジアのある島の人たちより、むしろアメリカの生活に近いかもしれません。こうなると、地域という概念もきわめて微妙かつ複雑なものであつて、我々が何を研究するか、すなわちディシプリナリーな個別研究の選択とかわってくるわけです。

したがって、園田さんのご意見、学問の進め方の基本姿勢については私は大賛成でありますけれども、ジャパノロジーからジャパニーズ・スタディーズへという一方的な流れを見ているだけでは、やや不十分ではないかと思われまします。むしろその間には解釈学的循環があるわけです。それぞれのディシプリナリーな研究と、それが選出する地域の問題、それから、逆に地域研究がディシプリナリーな態度、方法を選ばせる側面、その両方が絶えず絡まり合っているものだろうと思うのです。

最後に、それでは一体、地域研究というものの、地域という枠組みは我々の学問的な姿勢にとってどういう意味を持つか。これについては皆さんそれぞれに違ったご意見がございましょうから、私の個人的な意見ということにして申し上げます。

私はこれには二つあると考えております。一つは、地域という概念が乱暴であり、曖昧であるがゆえに持つ有効性であります。地域

という枠組みが、学問的に見れば、きわめて曖昧、いい加減なものであるということは認めざるを得ません。しかし、そのことがむしろよいという点があります。それは、ディシプリナリーな学問の傲慢さ、あるいは視野の狭さを打ち砕く力を持っているからであります。ある人間が劇場の研究をしている。ある人間が市場の研究をしている。こういうものがお互いに関連するかもしれないというのは、地域という枠組みを持ってこなければだれも思いつかないのです。

アメリカにマーケットと劇場を結びつけて研究した優れた本 (J. C. Agnew: *Worlds Apart: The Market and the Theater in American thought, 1550-1750*) がありますが、それはアングロ・アメリカという一つの地域研究という枠を与えられた時に初めて出てくる発想であります。ですから、地域といういわば乱暴な枠組みの中に押し込められた時に、いやでもそれぞれの個別研究者が別の領域に目を開かなければならなくなる、ということが地域研究のメリットであります。

第二に、地域研究の意味というのは、我々の普遍的な現象は常に例外的、個別的な場所にあはわれてくるということでもあります。現在、全人類的にあてはまると多くの人が考えているさまざまな社会科学、人文科学の概念は、多くの場合、ヨーロッパ、そしてアメリカというような地域の研究から生まれてきたものであります。これは結果としての地域研究というよりは、私はむしろ結果としての普遍学といいたのでありますが、実際、我々は自分の住んでいる社会、自分が知っている社会の中からしか抽象的、普遍的な知識をくみ取ることはいけません。

私自身の現在の興味はこの側面にあります。すなわち、日本を一つのピースとして見て、そこで見出された人間関係、あるいは人間の特殊な行動の営みというものを普遍的なモデルとして考え出す。この場合、日本でなくてもいいのでありまして、東京でもよければ、

京都でもいい。もしここにきわめておもしろい特殊な人間現象が見出されれば、そしてそれが普遍性を持つという論証がなされれば、この場合、地域研究は「東京」「京都」という名前をつけても構わないわけです。大変有名なケースですが、ご存じのように、バリ島を研究して、この島に政治の一つの形として劇場国家というものを見出した学者があります。もし劇場国家というのがこのバリ島に見出されるとするならば、そして、その劇場国家という政治のあり方が人間の政治一般の中である普遍的な有効性を持つとするならば、バリ島はまさに一つの固有文化圏であります。つまり、私が申し上げたいことは、普遍的な類型が見出される限りに於いて、ある地域

園田 コメント、どうもありがとうございました。私なりのコメントへのコメントをしたいと思います。

まず山崎先生には私のいいたいことをより雄弁に、より華麗な言葉でしゃべっていただいと感謝しています。山崎先生と同じようなことを、私はつたない言葉でしゃべったつもりです。

一つだけ誤解があると思うのです。これはリンハルトさんとも共通するのですが、私は日本研究がジャパノロジーからジャパニーズ・スタディーズへ全部移ったとか、そう行くべきであるとか、逆にジャパノロジーがいか、そういうことは何も申しておりません。そうではなくて異なるタイプの研究スタイルが、同一人の中で同居できるのではないかと考えているのです。今年のシンポジウムのサブタイトルとして日本学と（からではなく）日本研究となっているのはそのような考えがあったからです。リンハルトさんが、おまえは自国研究と外国研究を非常に単純に区別しているのではないかとおっしゃいましたが、まったくそのとおりで、議論を展開させるために、単純に区別いたしました。しかし、ペーパーでは、そんなに単純にはできないよということも書いたはずですよ。

が意味を持つ。逆にいえば、地域というものを初めに想定するのでなく、一つの人間現象の普遍化の可能性を見渡して、それが最初に見出された場所を一つの地域として考える。私はいまこの点に興味があります。いま後ろの上のほうの席に浜口先生がおられますが、浜口先生が例えば間人、ザ・コンテクチュアルという一つの人間類型というものを提出される。これがもし普遍的なインディビジュアルに対抗し得るほどの一つの人間関係として見出されるならば、それが見出された場所としての日本は逆に地域としての意味を持つと私は考えます。

ワーゴ きょうのセッションは私にとって一番おもしろくて、興味のあるものなんです。ことに、地域とディシプリンの相互関係あるいは相互影響というか、両方の循環性ということとは非常に賛成なんです。

自分のことをちよっといわせていただくと、日本のことを勉強し始めたのは、日本そのものに惚れてしまったからです。大学院にはいったところで、日本哲学をやるなら一応西田というものが一番偉いのではないかといわれて、西田哲学を勉強し始めたのですが、あまりにもヘーゲルの影響が強くて、自分の哲学的な背景は論理の実証主義であったから、もうとても難問題でしたが、とにかく続けました。

私の興味はいまでも、西田先生そのものが哲学者として正しいか正しくないか。その中には真理があるか真理がないかというところが一番興味のあるところです。もちろん、西田先生がどれほど多くの知識人に影響を与えたかというような問題にもちよっと興味があるし、非常に意義のある問題だと思いますが、それより、西田先生は哲学そのものをどれほど発展させたかということです。

僕がいつもびっくりしているのは、哲学にしろ、みな「日本哲学」とし

かわない。僕は、「日本哲学」ではなくて、西田の「哲学」、和辻の「哲学」が哲学として正しいかどうかで、日本で生まれた、日本で生まれていないはどうでもいいのです。ある意味では日本の背景を知らないとかよつと理解しにくいけれども、向こうで、フランス哲学がどうか、ドイツ哲学がどうかいろいろのことがいわれるのだけれど、たいがいはカントをやる時はドイツ人としてカントを勉強しないのです。哲学者として勉強するのはデカルトもしかり。その後から、ある人は、フランスにおいてはデカルト派とかパスカル派とかいろいろなことをいわれるかもしれませんが、基本的には哲学者として勉強する。

それにまた、「日本の経営」あるいは「日本の経営」というものがありますが、僕はそれを「Rational humanistic management」と名付けています。日本で生まれたのだけれど、それは一つの理想的な経営理論とみなすべきで、それとほかのアメリカとかヨーロッパでできた経営理論を対決させることが必要だ。どうしてそういうことをやらないのか。外人でも日本人でも、日本の研究をやると、たいがい日本の何とかなんとかというふうにやりがちではないかと思うのです。それはいかんと私は思うのです。

スリチャイ それぞれの基準で研究者の属する単位で、地域なり、文化なり、国家なり、それぞれの限界をどう考えていくのか、大変重要だと思います。この場合、国家に属する基準が一番問題だと思います。

もう一つは普遍性と特殊性の問題です。ワーズ先生も大変重要な指摘をされたのですが、いままで日本の経営とか特殊性ばかりを強調してきたが、日本の何を研究するにしても、もうちょっと広い視野で普遍的なことを追求すべきだと考えます。

しかしここには、方法論的には、大変重要な問題が含まれるのではないかと思います。つまり、日本で見られる現象を日本の特殊性ばかり強調して説明するのはだめとして、今度はそれが普遍性を持っているのではないかと、簡単に特殊性を普遍性に置き換えていく。方法論的反省はしないで、今度は簡単に普遍性ばかり強調する。その極端な方法論には大変な危険性

があるのではないかと思います。

方法論的に自分の属する社会しかわからないという考えが、さっきの議論でも断片的に出てきています。僕は、人類学のカテゴリーとしてエミツク、エティツクの分析は大変重要だと思います。けれども、そのエミツクとエティツクは複雑な社会を分析する場合は排他的概念ではない。だから方法論的純粋さに固執し、日本社会を説明する場合、日本概念でしか説明しきれないことばかり強調すると、理論の再建は中途半端になってしまうのではないかと思います。

ルーシュ 自国研究としての日本研究という問題について、二、三の問題を述べたいと思います。

日本では、西洋と同じように、学者が研究テーマを選ぶ時に、保守的になる傾向が強くなると思います。また日本の研究者は日本的な独特の特性を探ろうとします。すでに頭の中に適切なテーマとつまらないテーマというものがなんとなくあり、例えば「尼五山」の研究は自国研究としての日本研究の中ではほとんどなされてきませんでした。これは多分、研究者といえは男の人が中心だったからだと思いますが、女の修道院はおもしろくないから研究しないという、暗黙の了解が日本の研究者の中にあつたのではないでしようか。世界の中の日本文化を明らかにしようとするとき、こういう問題を無視すると、日本文化の意義が小さくなってしまふ結果になるのではないかと思います。

五年前から西洋では大きな女の修道院、つまり尼寺の調査が行われているのです。ほとんどがキリスト教の修道院ですが、地域的にはイタリア、フランス、ドイツ、イギリスまで含んだ非常に幅の広い調査なんです。

このプロジェクトをすすめている学者たちに、日本の尼寺制度とか尼寺生活や禅の修道院の調査も入れたらどうですかといったら、向こうはびっくりして、「日本の中世にも女の修道院制度があつたの」と言われました。日本の中世の禅の五山文化の本や日本歴史の本にも、中世の五山制度のしっかりした論文の中にも、日本語の本にしても、英語の本にしても、尼五

山制度の存在は一言も書いてありません。

ですから、ここでちょっと主張したいことは、一方では非常にユニークな現象でありながら大変普遍性を持っている日本の女性の修道院生活を世界的な調査に入れることができたなら、これは本当の国際的な研究のチャンスではないかと思われれます。これは西洋のネコと日本のイヌを比べているわけではなく、西洋の女の修道院と日本の女の修道院を比べるのだから、仏教にせよ、キリスト教にせよ、地域・宗教を超えて意義のある研究じゃないかと思われれます。

吉田 ルーシユさんの尼五山の問題でございますが、これは一面からいうと、きょう話題になっております地域カディシプリンかという問題の、特にディシプリンというものについての落とし穴に対する一つのご注意であつたろうと考えます。

私はタイラーさんの論文についてコメントいたしましたけれども、私がタイラーさんの論文で最も評価いたしましたのは、あれを文学としてとらえられたことである。ところが、実は、検校塙保己一のことえた最初の『群書類従』においては、あれは文のみが紹介されている。つまり、江戸時代の日本人は文をかなり重視しながら見ていたはずですが、それがいつの間にか忘れられて、絵画のみに集中してしまった。

こういうディシプリンというものがあつた程度固定的に考えられすぎているところがあるのではないか。それで結局尼五山が日本の研究者の視野から消えてしまった。こういう意味で、ディシプリンというものをあまり固定化しないというか、もう少し流動的に、また、新しいディシプリンの問題がさらに考えられてよいのではないか。エリアカディシプリンかという二者択一か、あるいは循環かという問題と同時に、そうした新しいディシプリンに対して我々はもっと弾力的な目を持たねばならないのではないかと。そういう一つの述べ方でございます。

芳賀 園田さんのきょうの報告にちよつと絡みます。

きのうあたりから、地域研究とディシプリン研究の両者のかかわりが問

題になっているのですが、これは非常に大事な問題であり、それを山崎さんは「解釈学的循環」という言葉で説明してしまった。これもまたいかに山崎流なんですが。

そのことに触れて園田さんが発言していた時にしばしば使った言葉に「広く浅く」というのがあつた。broad and shallow あるいは broad but shallow とかね。これがすでに間違いを呼びやすいのではないか。一般にどちらかというと、地域研究は広い、専門研究、ディシプリン研究は深いあるいは狭い。しかし、これからの研究は、ある地域を対象とした専門的研究をやっていく場合には、広くなければ深くない、狭いことはつまり浅いことであるというふうには、我々、認識をこの辺で変える必要があるのではないかと思うのです。shallow unless broad ですか。しばしば狭いことが浅いことになる。学問全体の状況が、ことに人文社会の学問についてはそういうふうに変わつてきているのではないか。ディシプリンの間の相互交流が非常に進んできているし、地域間の交流も進んで、いわゆる国際化が進んできている。そういう中にある場合、広くしなければとても深くならない。

これから、広いことがつまり深いことを招き寄せるようになるためには、いろんな連想力が必要になるでしょう。一つの対象を見て、ああ、あれだと思ひ出すだけでは足りないものであつて、ネコも思ひ出す。トラもついぞに思ひ出すというふうになつていく。そして金魚を思ひ出したりする。そういう一種の連想の遊びが許容される寛容な空間が保証された時に、日本研究であれ、何研究であれ、学問は広く深くなる。広くなければ深くならない。浅いことは狭いことである。深くなければまた広くもなるということもあるだろうと思ひます。

そういうことをちよつと絡んで申し上げておきます。

園田 僕はもうちよつと私ぐらいの凡人の研究者のことを考えておりまして、並の研究者がどうやったら広くて深いというふうになれるかという

共同研究のような形でしかあり得ないのではないかと思っています。だから、個人で充分に広くて深いスーパーマンの芳賀徹にはこのような問題意識は必要ないと思います。

中西 さっきリンハルトさんが、自国研究という言葉を非常に巧みに説明なさって、そういう区別は無効であると、断定しますとそういうお話を読まれたかと思えます。大変妥当な意見だけれども、なおかつその上で、園田さんの自国研究としての日本文化研究という概念は成り立つのではないかと思うのです。

それはなぜかと申しますと、リンハルトさんが強調されたものは、国籍といいますが、姻戚というか、あるいは生活体験というか、そういういつてみれば形に属するようなことだったように思うのです。しかし、果たして研究というものはそういう形の上で生み出されるものなのかどうか。

研究というものはきわめてメンタルなものであって、ナシヨナリティーがどうであるとか、フィジカルにどうであるとかということではないのではないか。例えば二つの国の体験を持っているというのは、ヨネ・ノグチなんかがそうだと思いますが、国土、風土を失った哀しみというようなものが彼の詩をつくっているような気がいたします。

山崎さんがさっきことわざを挙げていたわしたので、私もそのひそみにならつていえば、イギリスのことわざだったでしょうか、「二つのイスに腰かけると間に落ちる」というのがあります。どちらかのイスに腰をかけなければいけない。そうすると、メンタルなものとしては、どちらかにディペンドして、その上で研究していくということが、その人がフィジカルにどういう生活体験を持っているかということのほかにあるのではないかと。我々はそういうものこそ研究のベースに据えて研究していかなければならないのではないかと感じるのです。

リンハルトさんのコメントにまたコメントをするみたいな格好になったかもしれませんが、注に注をつけるのは東洋の伝統でありますので、ちょっと申し上げました。

高 二つだけコメントをしたいと思います。

一つは、地域研究と専門研究を両立させるというふうに園田先生がおっしゃっておりますが、そのとおりだと思うのです。例えば、日文研の名前として「日本文化研究センター」となっていますが、前の「日本」というのは確かに地域だと思えますけれども、「文化」というのは、これは一種のディシプリンではないでしょうか。ですから、名前としても地域と専門を両立させるという形になるのではないかと思うのです。

もう一つは、地域というのはいろんな段階があるということです。東京という地域もあるし、京都という地域もあるし、北京という地域もある。中国文化は本当に一つのまとまったものであるか、あるいは、西北の文化と上海の文化はだいぶ違うのではないかという議論もあります。

だから園田先生が言うほどには自国と外国をあまり意識しなくてもいいのではないかと思います。例えば宇宙という立場で見ますと、地球全体としては一つの地域になるわけです。そうすると、日本文化研究というのはその目標はどうなっているかということになりますが、私にいわせていただきますと、それを人類文化の立場で勉強する。山崎先生が一つのケーススタディーとして勉強すると指摘されましたが、まさにそのとおりだと思うのです。

ですから、私にいわせていただきますと、日本という地域、文化というのは一種の専門。それから、その目標を忘れてはいけないと思いますが、その前には「国際」という文字がつけられておりますから、目標としては人類文化と。そういうふうに考えたら安全じゃないかと思うのです。それで「国際日本文化研究センター」ということになるのではないかと思うのです。

ネウストプニー 自国研究と他国研究としての日本研究のことですが、これは当分違うものとして続くのではないかという感じがします。というのは、日本人にとっての日本研究の機能と外国人にとっての日本研究の機能というのは、いまのところ、必ず違うのです。それは非常に近くなったこ

とはなつたかも知れませんが、当分、別のものとして続くだろうと思います。

園田 自国研究ということですが、リンハルトさんのご指摘の中に非常にいい表現だなと思ったのが一つあったのです。「ある程度の自国」ということなんです。四年なり五年なり日本体験をする。そうすると、やはりもうある程度深くかわり合ってしまった国なわけですね。それはある程度の自国ということになるかもしれないし、ある程度の例えば京都市民である。そういう感じがいたします。私も、自分の感覚として、ある程度のボストン市民という気があるわけです。常にそこは気になっているし、目にとまれば情報を集めているし、また行きたいと思っている。だからそういう時代なんだと思います。

だけど、どこかにヘソは、中西先生がおっしゃったように、やはり自国というのは最後は残るのではないのでしょうか、ここしばらくは。

梅原 いま高増傑先生から、国際日本文化研究センターの意味につきまして解説をいただきました。これは本来所長が先にやらなくちゃならないこととでございまして、どうも所長の解説よりはみごとに解説していただいたと思います、私はほとんど同じ意見でございます。